

参加者数

約 250 名(約 40 の学校・関係機関)

ポスター発表件数: 5 件

当日スケジュール

時間	内容	場所
12:50- 12:55	開会 挨拶:成蹊学園学園長 江川雅子	4 号館
第一部 司会進行:成蹊学園サステナビリティ教育研究センター 小田宏信		
12:55- 13:50	基調講演 「ESD の進化-どう変わろうとしているのか-」 成蹊大学経済学部教授/教職課程センター所長 二井正浩氏	4 号館
ポスター発表コアタイムおよび休憩		
13:50- 14:10	ポスター発表 1 成蹊学園 成蹊小学生作成の環境地図作品展示 けやき循環プロジェクトの活動展示 2 大妻中野中学校・高等学校 「知られざるスイスとモナコの魅力」 3 神奈川県立有馬高等学校 「総合的な探究の時間とチャレンジ力育成の実践」 4 東京都立山崎高等学校 「ユネスコスクールづくりと全人的な教育-教科活動と教科外活動の役割-」 5 東洋女子高等学校 ミュージアム学習における作成ポスターの展示	4 号館入口
第二部 活動発表・分科会 ※同時時間帯に 3 会場にわかれて実施		
14:10- 16:30	<活動発表> 1 成蹊中学・高等学校 「ユネスコスクール探究プロジェクト~年間交流の物語」 2 東京都立山崎高等学校 「都立山崎高等学校のホールスクールアプローチについて」 3 常磐大学高等学校 「私たちとカンボジアのつながり ~研修旅行を通して考える ESD~」 4 東洋女子高等学校 「東洋女子の探究的な学び」 5 幼保連携型認定こども園 正和幼稚園 「園内田んぼを拠点に」 6 千葉商科大学 「千葉商科大学の ESD」	4 号館

	7 東海大学、かながわユネスコスクールネットワーク (KAN) 「日本人学校での ESD 活動における視点と課題 ～インド、カタールでの実践から」	
14:10- 16:30	<分科会 A> 玉川大学、大妻中野中学校・高等学校、東京都立山崎高等学校 「SDGs に主体的に向き合える地球市民の育成 －若者エンパワメントの新たな挑戦」	3号館 102
14:10- 16:30	<分科会 B> 創価大学、創価高等学校 「これからの平和教育を考える －核廃絶ゲームを通じた意識啓発の意義」	3号館 203
第二部報告、閉会 司会進行：成蹊学園サステナビリティ教育研究センター 小田宏信		
16:40- 17:00	第二部報告 報告者：成蹊大学、玉川大学、創価大学 閉会 挨拶：成蹊学園サステナビリティ教育研究センター 小田宏信	4号館



2025年8月7日
第6回ユネスコスクール関東ブロック大会

ESDのこれまでとこれから

—どう変わろうとしているのか—

成蹊大学 二井正浩

I ESDのこれまで

1 ESDの始まり

(1) 経過

- ①1987年 国連 ブントラント報告書『我ら共通の未来(Our Common Future)』
SDとは「**将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニーズを満たすこと**」
 - ②1992年 第1回地球サミット(リオ・デ・ジャネイロ)
環境と開発に関するリオ宣言
「アジェンダ21」を採択 サステナビリティ教育の重要性強調
 - ③2000年 国連総会で「**国連ミレニアム宣言**」採択
2001年 国連「**ミレニアム開発目標(2015年までに)**
; *Millenium Development Goals (MDGs)*」策定
(**貧困・飢餓, 初等教育, 女性, 乳幼児, 妊産婦, 疾病, 環境, 連帯の8目標**)
 - ④2002年 第2回地球サミット(ヨハネスブルク)
小泉首相が「国連持続可能な開発のための教育の10年」を提唱
→同年 国連総会で採択
- ➡2005年 「DESD; 国連持続可能な開発のための教育の10年」スタート

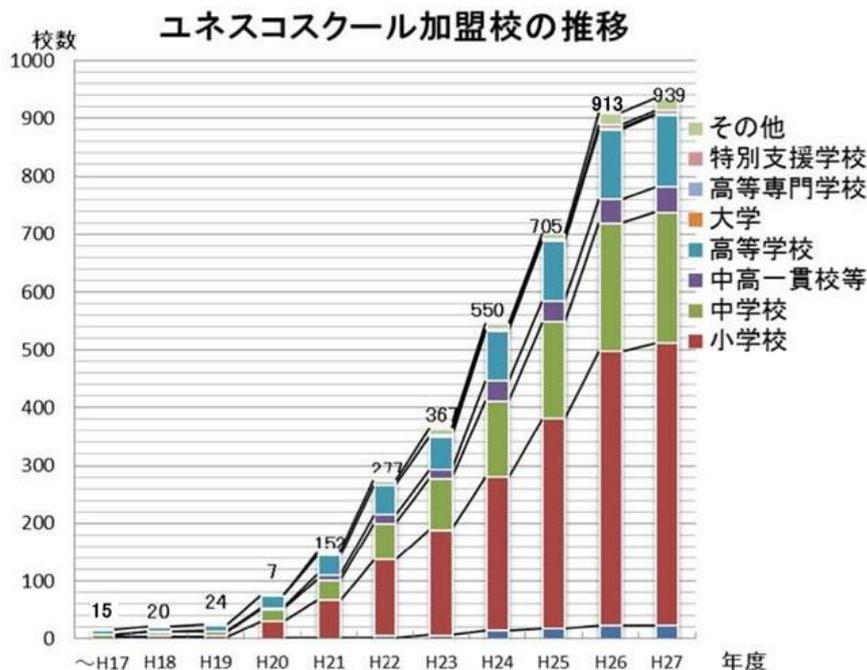
2 【DESD:「持続可能な開発のための教育の10年」の時代 =ESDの模索期 (2005~2014年)】

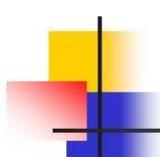
(1) 経過

- ① 2006年 関係省庁連絡会議
「我が国における『国連ESDの10年』に関する実施計画」策定
- ② 2008年 日本ユネスコ国内委員会
「持続可能な開発のための教育(ESD)の普及促進のための
ユネスコスクールの活用に関する提言」
・ESDを「持続発展教育」と略称, **ESDの概念の普及促進**
・ユネスコ協同学校を「ユネスコ・スクール」と改称
- ③ **2008・2009年告示学習指導要領の社会・理科等**にESDの視点が生かされる
- ④ **2009~2012年 国立教育政策研究所**
『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究』
- ⑤ 2014年 ESDユネスコ世界会議(あいち・なごや会議)
→「**あいち・なごや宣言**」
・2015年以降の**Global Action Program (GAP; DESDの後継)**
・2015年に国連で採択予定になっている**SDGs**との関係性を確認
第6回ユネスコスクール全国大会
→「ESD推進のためのユネスコスクール宣言(岡山宣言)」採択

(2) 特徴

- ① 実践校の拡大: 急増したユネスコ・スクールと一部の関心のある学校
(ユネスコ・スクール: 2005年15校→2015年939校)





② 「ESDとは何か」の模索

= 包括的またはholisticであるが故に、分かりにくい
ねらいが抽象的で分かりにくい
従来の「〇〇学習」との違いが
分かりにくい

初期の取組は
「環境教育」「国際理解教育」に集中



※出典:「ユネスコスクールと持続発展教育」(日本ユネスコ国内委員会) 2013.2

③ 「ESDでは、何をどうすれば良いのか」が分かりにくい

2009～2012年 国立教育政策研究所『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究』

ESDの視点に立った学習指導の目標

教科等の学習活動を進める中で、

持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために
必要な能力や態度を身に付ける。

課題を見いだすための視点

「持続可能な社会づくりに関わる課題を見い出す」ためには、意識や構えが必要です。
持続可能な社会づくりの課題を見いだすための視点の例として6点示しています。

- I 多様性・・・いろいろある
 - II 相互性・・・関わり合っている
 - III 有限性・・・限りがある
 - IV 公平性・・・一人一人大切に
 - V 連携性・・・力を合わせて
 - VI 責任性・・・役割や責任を持って
- など

身に付けたい力

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例として7点示しています。

- ① 批判的に考える力
 - ② 未来像を予測して計画を立てる力
 - ③ 多面的、総合的に考える力
 - ④ コミュニケーションを行う力
 - ⑤ 他者と協力する態度
 - ⑥ つながりを尊重する態度
 - ⑦ 進んで参加する態度
- など

(国立教育政策研究所「持続可能な開発のための教育はこれからの世界の合い言葉」2015.3)

④学校全体(ホールスクールアプローチ)での取組の充実

- 総合的な学習の時間の活用を軸
- イベント型の傾向, 特別感
- 環境学習・地域学習に取り組む学校が多い

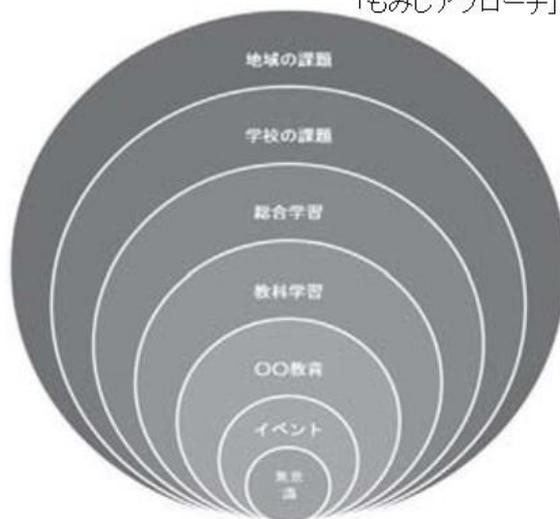
学校教育におけるESDプログラムの類型

ESDのタイプ	代表事例・GP	長所
教科連携型	・ESDカレンダー	◎教科との関連が分かりやすくESDの意識化が図れる
プロジェクト型	・D-Project ・ESD Riceプロジェクト ・RICEプロジェクト	◎ミッション・方向性がはっきりしている
テーマ型	・世界遺産学習 ・平和学習	◎地域の良さ(遺産)や課題をアピールできる
総合カリキュラム型	・ESDプログラムチャート ・多摩一型問題解決学習	◎地域に根ざした体系的・探究的なプログラム開発が可能
クラブ活動型	・ユネスコクラブ(高・大)	◎取組が長続きしており, ユネスコ活動とのつながりも強い

(及川幸彦)

横浜市立永田台小学校の学校ESD評価指標

「もみじアプローチ」



『ユネスコスクールの今 広がりが広がるESD推進拠点』 ACCU 2015

東京都多摩市立多摩第一小学校の取組

問題解決のプロセスによる授業の展開

東京都多摩市立多摩第一小学校では、身に付けたい力として、特に、「問題解決力」の育成を目指しています。いかだ作りに挑戦する「多摩川探検」(3年生), 多摩川の上・中・下流にある学校とテレビ会議で発表し合う「多摩川水質調査」(4年生), 文化の多様性を学ぶ「世界の米料理」(5年生), エネルギーについてメールで意見交換する「海外校との交流」(6年生)など、生活科・総合的な学習の時間を中心に、問題解決のプロセスを通じて、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力などの育成に取り組んでいます。

「問題解決力」の評価に当たっては、能力・態度のつながりを意識し、毎回の活動の後に「振り返りカード」に活動内容と気付いたことを記録したり、単元学習の前後での意識調査やイメージマップを通して、課題把握力や事象の関連性への理解度を評価したり、活動でまとめた作品をファイルにまとめてポートフォリオ評価をしています。

多摩第一小で育む能力と態度		「7つの能力・態度」との関係
問題解決力	課題を見付ける力	①批判的に考える力
	仮説に基づき計画を立てる力	②未来を予測して計画を立てる力
	調べる力・まとめる力・発信する力	③多面的、総合的に考える力



多摩川探検

(国立教育政策研究所「持続可能な開発のための教育はこれからの世界の合い言葉」2015.3)

3 【GAPの時代(2015～2019年)】

=SDGsの流行とESDの普及



(1) 経過

① 2015年 国連総会

「持続可能な開発のための

2030アジェンダ」採択で

「持続可能な開発目標(SDGs)」が提唱される(MDGsの後継)

T4.7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」

➡ ESDとSDGsの相関性

② 2016年 日本ユネスコ国内委員会

「持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引き」(初版)

③ 2016年 関係省庁連絡会議

「我が国におけるESDに関するグローバル・アクション・プログラム

実施計画(ESD国内実施計画)」策定

④ 2017年 日本ユネスコ国内委員会

『今日よりいいアースへの学び

持続可能な開発のための教育(ESD)の更なる推進に向けて

～学校等でESDを実践されている皆様へのメッセージ』

⑤ 2018年 日本ユネスコ国内委員会

「持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引き」(第2版)

⑥ 2017・2018年告示学習指導要領 ➡ 全ての学校でのESDの実施

前文：これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、**持続可能な社会の創り手**となることができるようにすることが求められる。
(中学校：小・高もほぼ同じ)

総則：豊かな創造性を備え**持続可能な社会の創り手**となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、**学校教育全体並びに各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動(以下「各教科等」という。中略)の指導を通して** [中略] 教育活動の充実を図るものとする。
(中学校：小・高もほぼ同じ)

➡ 各教科を含むあらゆる場面での
ESDの実施

EX. 「歴史総合」の場合

【「歴史総合」の大・中項目】(下)

A 歴史の扉

- (1) 歴史と私たち
- (2) 歴史の特質と資料

B 近代化と私たち

- (1) 近代化への問い
- (2) 結び付く世界と日本の開国
- (3) 国民国家と明治維新
- (4) 近代化と現代的な諸課題

C 国際秩序の変化や大衆化と私

- (1) 国際秩序の変化や大衆化へ
- (2) 第一次世界大戦と大衆社会
- (3) 経済危機と第二次世界大戦
- (4) 国際秩序の変化や

大衆化と現代的な諸課題

D グローバル化と私たち

- (1) グローバル化への問い
- (2) 冷戦と世界経済
- (3) 世界秩序の変容と日本
- (4) 現代的な諸課題の形成と展望

18世紀後半～現在

産業社会と国民国家を形成する動きがみられ、社会が大きく変化しはじめた。

19世紀後半～

大衆の歩みが社会に在り方を示すようになった。

20世紀半～

人・モノ・情報が国を超えて一層、よくなりました。

現代的な諸課題につながる歴史的な状況(例)
 <a 自由と制限><b 富裕と貧困><c 対立と協調>
 <d 統合と分化><e 開発と保全> など

学習内容の
 焦点化

●歴史の扉～歴史をなぜ学ぶか、どう学ぶか～(例:歴史と現在～現代的な諸課題)

●近代化と私たち～社会構造の変化を考察するために

【単元例】
 ・結び付く日本と世界
 ○産業社会の到来、政治の変革
 ○日本の改革、アジアやアフリカの変容
 など
 (まとめ)歴史と現在①～近代社会

【考察を深める問いの事例】(例) a～bなどを中心として
 ・日本・世界はどのように結び付いたか
 ・工業化と政治変革はどのように進化したか
 ・日本、アジアやアフリカはどのように変化したか
 (まとめ/基軸となる問い) 社会の近代化は何をもたらしたか など

●大衆化と私たち～個人・集団と社会との関わりを考察するために

【大項目BからDまでの中項目の構成】(下線筆者)

【中項目(1)の学習の特徴(身近な資料から考察する、過去への問い)】

中項目(1)では、生徒にとって身近な生活や社会の変化を表す資料を取り上げて、情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を身に付けるとともに、歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現する。(後略)

【中項目(2)及び(3)の学習の特徴(主題を踏まえた考察と理解)】

中項目(2)及び(3)では、中項目(1)の生徒が表現した問いを踏まえ、主題を設定し、資料を活用して課題を考察する。主題の設定に当たっては、学習のねらいに則した考察を導くようにするとともに、生徒の課題意識を深めたり、新たな課題を見いだしたりすることができるように留意する。それらの主題を、学習上の課題とするための問いに設定することで、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史の理解を深める学習となるよう工夫することが大切である。

【中項目(4)の学習の特徴(歴史の大きな変化と現代的な諸課題)】

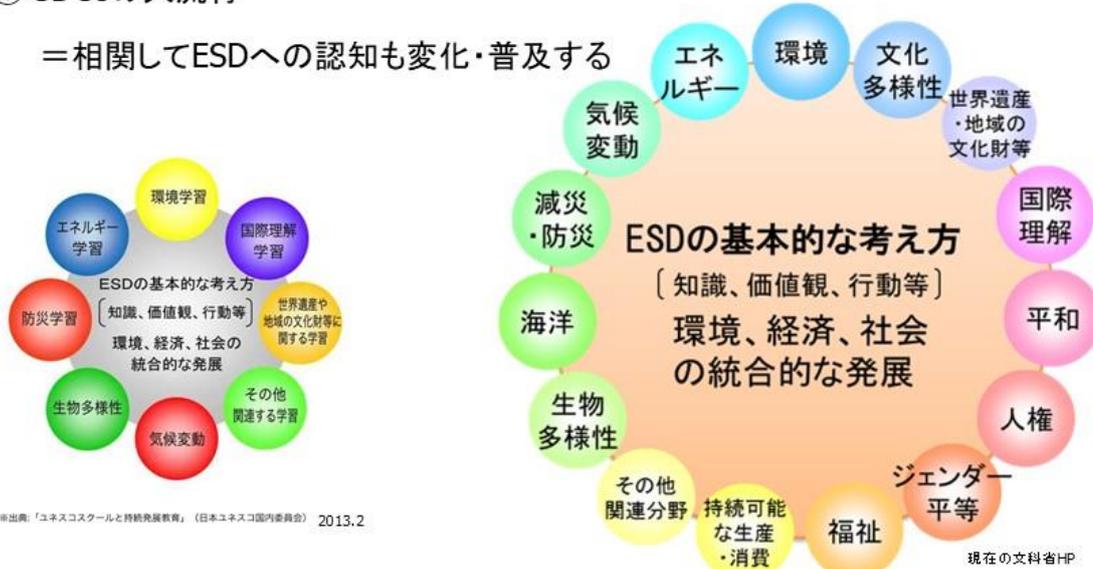
大項目B及びCの中項目(4)では、中項目(1)から(3)までの学習内容を踏まえ、「自由・制限」、「平等・格差」、「対立・協調」、「統合・分化」、「開発・保全」など、現代的な諸課題の形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点を活用して主題を設定し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察し、表現する。

大項目Dの中項目(4)「現代的な諸課題の形成と展望」は、この科目のまとめとして位置付けられている。これまでの学習の成果を活用し、生徒が持続可能な社会の実現を視野に入れ、主題を設定し、歴史的な経緯を踏まえた現代的な諸課題の理解とともに、諸資料を活用して探究する活動を通じ、その展望などについて考察、構想し、それを表現できるようにする。

(2)特徴

① SDGsの大流行

= 相関してESDへの認知も変化・普及する



※出典:「ユネスコスクールと持続発展教育」(日本ユネスコ国内委員会) 2013.2

現在の文科省HP

②ユネスコ・スクール拡大:2015年913校→2019年1120校

③ GAPの取組の進展

- ・政策的支援
- ・機関包括型アプローチ
- ・教育者
- ・ユース
- ・地域コミュニティ

1. 政策の推進 (Advancing policy)

2. 学習環境の変革 (Learning Environment)

3. 教育者の能力構築 (Educators)

4. ユースのエンパワメントと参加の奨励 (Youth)

5. 地域レベルでの活動の促進 (Community)

④ 学習指導要領の改訂
 =ESDが学校教育(学習指導要領)の中心的価値観の一つに位置づけられる

II ESDのこれから

4 【ESD for 2030の時代(2020~2030年)】 現在, 中間地点

(1) 経過

=ESDVer.2?とユネスコ・スクールの課題

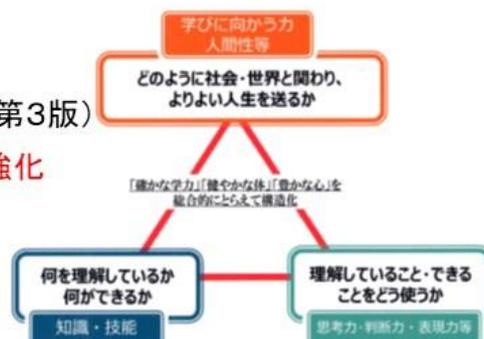
- ① 2019年 国連総会
 「持続可能な開発のための教育(SDGs)実現に向けて
 ESD: Towards achieving the SDGs: ESD for 2030」採択(GAPの後継)

➡ 2020年 **ESD for 2030** スタート

- ② 2021年 関係省庁連絡会議
 「我が国における持続可能な開発のための教育(ESD)
 に関する実施計画(第2期ESD国内実施計画)」策定

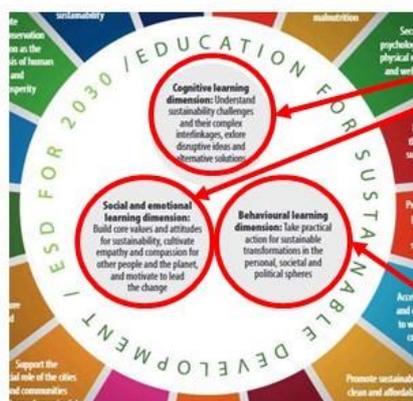
- ③ 2021年 日本ユネスコ国内委員会
 「持続可能な開発のための教育(ESD)
 推進の手引き」(第3版)

➡ 学習指導要領での位置づけの明確化・強化
 教科等の指導
 単元計画
 カリキュラムデザイン
 評価 etc.





② SDGs達成に向けたESDの役割の明確化



- A) **認知学習の側面**
持続可能性の課題とその複雑な相互関係を理解し、革新的なアイデアや代替的な解決策を探究する。
- B) **Social and emotional 学習 (SEL) の側面**
(自己認識・自己管理・社会認識・対人関係スキル・責任ある意思決定)
持続可能性に対する価値観や態度を養い、他の人々や地球に対する共感や思いやりを育み、変化をリードする意欲を高める。
- C) **行動学習の側面**
個人的、社会的、政治的な領域で、持続可能な変革のための行動を実践できる。

③ 現行学習指導要領では、
教科等の取組をはじめとしたあらゆる教育活動において
ESDが重視される (ESDの日常化)

小学校は2020年度から全面実施
中学校は2021年度から全面実施
高校は主に2023年度入学生から実施

(3) 課題

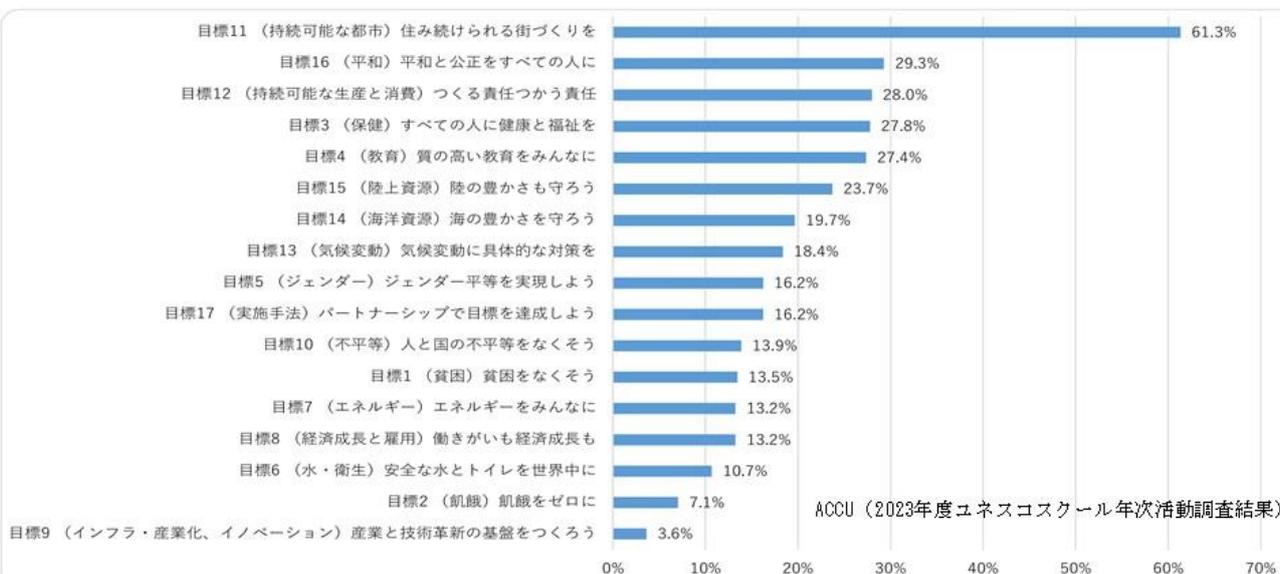
➡ ユネスコ・スクールの課題

- ① 全ての学校でのあらゆる場面でのESD実施
＝ユネスコ・スクールのアイデンティティの危機
- ② 現状のESDでは間に合わないという焦燥感 ＝ 変革の視点の必要性
(永田佳之まとめ(『ESD研究』第3号,2020, PP.92-93))
 - 1) Disruption
「これまでと一線を画す,しんどいけどやる,何気ない日常との決別をめざす。」
 - 2) System-wide Approach Systemic Level
「システム内の変化よりも,システムそのものの変化をめざす。」
 - 3) Transformative Action
「自分から変わる,行動で示す。まずは大人から,そして学校に。」
 - 4) Citizenship in Action
「行動しなきゃ意味がない。」
 - 5) Culture of Sustainability
「文化(骨の髄)まで深く,変わる。」

III おわりに(再点検事項)

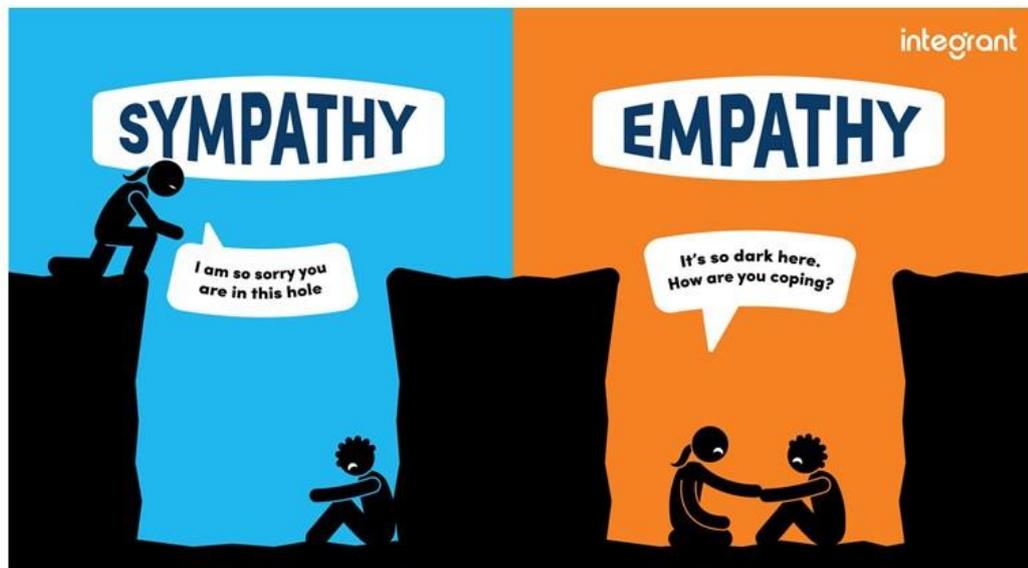
- ① 取り組んでいるESDと取り組むべきESDの乖離はないか。

図 31 ユネスコスクールの教育活動で取り上げた SDGs17 の目標



Ex. グローバルな課題への取組は十分だったか。

- ②シンパシー(sympathy)に終わっていないか。
エンパシー(eympathy)も育っているか。



([Understanding Empathy vs. Sympathy - Sanitas Hub](#) 2025年7月31日確認)

- ③ 真に「自分事」の問題にするにはどうするか？
(ひとり一人の子どもの実存的アプローチをどう育むのか。)

- ④ SD, ESD, SDGs自体への分析的・批判的視点をどう生かすのか。

a) SDGsウォッシュ

SDGsに取り組むことの価値が高まるにつれ、
実態が伴わないみせかけのSDGsが拡大する
(企業や政策のイメージアップ戦略など)

b) 先進国による国際的な格差の固定化, 恣意的な誘導

先進国による新興国の経済成長の抑え込みのロジックではないか

c) 大国は無関心なのに.....

中華人民共和国やアメリカ合衆国などの無関心

d) 困難な目標・必要な覚悟

- ③「熱い心と冷たい頭 "Cool Head, but Warm Heart."」

(元国連難民弁務官 緒方貞子, 英国経済学者A.マーシャル)

・自己満足・善意の押しつけ・ありがた迷惑な行動主義

Ex. ・無責任な寄付

・過度な禁欲主義, 周囲への強要

【結語】

学校や教室にも差別・偏見・格差・不公平はあります。いじめや暴力はその最たるものでしょう。子どもにとって、学校や教室は世界そのものです。その意味で、自分の世界で生じた差別・偏見・格差・不公平から目を逸らさず、声をあげることのできる子どもを育てること、これが **ESD** の第一歩だと思います。身の回りで起きる「自分事」の問題、人間の尊厳や基本的人権に関わる問題に声をあげられないで、どうして広い世界の差別・偏見・格差・不公平に立ち向かうことができるでしょうか。声をあげる人、立ち上がる人、欧米では“UPSTANDER”という表現をよく見かけるようになりましたが、身の回りに様々な形で存在する差別・偏見・格差・不公平を自分事として見逃さず、積極的に異議を唱えることができるように子どもを育てることが **ESD** の原点ではないでしょうか。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章前文の後には「ここに終わりを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代りに、無知と偏見を通じて人種の不平等という教養を広めることによって可能にされた戦争であった」と記されています。今こそこの反省を思い返し、これからの **ESD** がどうあるべきかを再考する時期なのかもしれません。

(二井正浩「あとがき」文部科学省国立教育政策研究所・
独立行政法人国際協力機構共同プロジェクト『グローバル時代の国際教育のあり方国際比較調査フェーズⅡ』2024をもとにした。)

ポスター発表

SDGs の広がりや国際的な観点から議論するもの、地域の視点での活動、学校間の連携やプロジェクト等について、現在・過去の活動事例、今後の活動計画等の発表を広く募集し掲載した。

<ポスター発表校>

1 成蹊学園

成蹊小学生作成の環境地図作品展示

けやき循環プロジェクトの活動展示

2 大妻中野中学校・高等学校

「知られざるスイスとモナコの魅力」

3 神奈川県立有馬高等学校

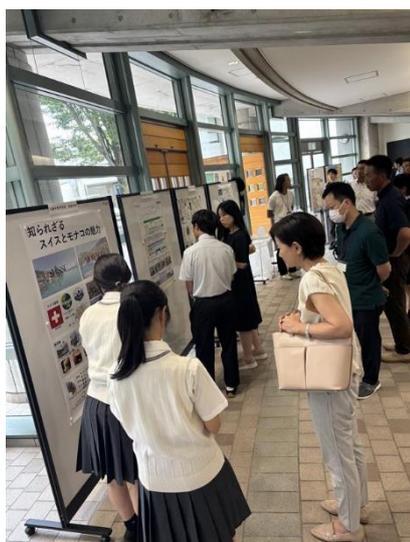
「総合的な探究の時間とチャレンジ力育成の実践」

4 東京都立山崎高等学校

「ユネスコスクールづくりと全人的な教育ー教科活動と教科外活動の役割ー」

5 東洋女子高等学校

ミュージアム学習における作成ポスターの展示



活動発表

7校がそれぞれの実践的な取り組みについて発表を行った。

<活動発表1>

運営者/発表者
成蹊中高ユネスコスクール探究プロジェクト/生徒4名
内容
<p>「ユネスコスクール探究プロジェクト～年間交流の物語」</p> <p>成蹊中学・高等学校では、有志の生徒が「ユネスコスクール探究プロジェクト」のメンバーとして活動している。成蹊学園の理念である「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」に基づき、年間を通じて多様な活動を展開しており、本発表では2024年度の活動実績をもとにプロジェクトの内容を紹介した。</p> <p>■活動の背景</p> <p>プロジェクトの活動は、今年で5年目となる。</p> <p>「知る」「実践する」「交流」「継続・挑戦」「幅を広げる」のステップで、毎年、活動の目標を定めてきた。参加生徒が主体的に学び、地域や国際社会とのつながりを深めることを目指している。</p> <p>■主な活動</p> <p>以下は、2024年度に行った月別の主な活動内容である。</p> <p>4月：メンバー集め、ルクセンブルクとの国際交流 5月：留学生との交流 6月：地域でのごみ拾い活動 7月：他校との交流 8月：ユネスコスクール関東ブロック大会への参加 9月：ワールドクリーンアップデーへの参加 10月：オーストラリアとの国際交流 11月：地域イベント（おさしの環境フェスタ、エコマルシェ）への出展 12月：落ち葉拾い、焼き芋大会 2月：留学生との茶道体験、SDGs実践発表会への参加 3月：学内行事でのワークショップ出展</p> <p>■活動の様子と成果</p> <p>プロジェクトの主だった以下の活動について、写真とともに紹介した。</p> <p>①地域活動</p> <p>ごみ拾いや落ち葉拾い、焼き芋大会などを通じて、学内外とのつながりを深めた。</p>

②国際交流

留学生との茶道体験や浴衣での交流を通じて、日本文化の理解と発信を行い、国際的な視野を広げる機会を得た。

③環境活動

ワールドクリーンアップデーやエコマルシェなど、持続可能な社会づくりに向けた実践的な取り組みを行った。

④生徒の創意工夫

「すこすこフレンズ」などのキャラクターを用いた啓発活動を行い、楽しみながら学びを深めた。

■今後の展望

発表の最後には、活動の幅を広げ、より多くの学校や団体とつながりながら、ユネスコスクールとしての使命を果たしていく意気込みを語った。



活動発表

<活動発表 2>

運営者/発表者

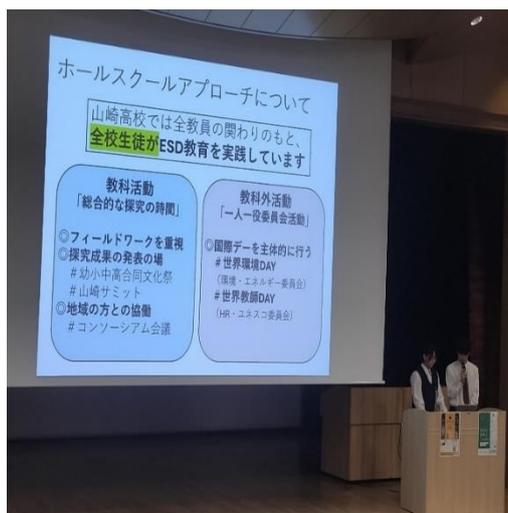
東京都立山崎高等学校/生徒 2 名

内容

「都立山崎高等学校のホールスクールアプローチについて」

本校は、2022年11月にユネスコスクールへ加盟し、ホールスクールアプローチを軸に教育活動を展開している。活動発表会では、代表生徒2名により本校のユネスコスクールにおける教科活動と教科外活動を紹介した。

教科活動では、「総合的な探究の時間」にて、町田市山崎町でのフィールドワークから得られた探究結果の討論の場「山崎サミット」の開催、地域の方々と協働した探究の在り方を議論するコンソーシアム会議について発表した。教科外活動では、生徒一人一役を掲げ、委員会活動を中心に国際デー「世界環境デー」をもとにした学校行事「GREEN DAY」と文化祭展示を含む「世界教師デー」に関する行事を実践した。生徒が日頃から課題を話し合い、自分ごととして捉えることで、持続可能な社会の一員となれるような姿勢が培われた。



活動発表

<活動発表 3>

運営者/発表者
常磐大学高等学校/市村卓司(教員)・松田 葵妃(2年)・難波 郁帆(2年)
内容
<p>「私たちとカンボジアのつながり～研修旅行を通して考えるESD～」</p> <p>1,常磐大学高等学校がユネスコスクールへ加盟するまで 発表者：市村卓司(教諭) 2016年度の1学年特進選抜コース(16名)から「総合的な学習の時間」に「探究」の授業を開始した。2022年度から全国的に開始された「総合的な探究の時間」の6年前から取り組みがはじまった。その際に常磐大学と連携したフィールドワークを伴うESD学習、オーストラリアへの国際理解教育の研修旅行を開始した。さらに、こうした活動を通じて、より地域や世界の方々と交流したい、理解しあいたいと考え2019年9月にユネスコスクールへの加盟申請を行った。その際、ASPUnivNetの成蹊大学から加盟の支援を受けて、2025年4月にユネスコスクールに正式加盟した。</p> <p>2,私たちとカンボジアのつながり 発表者：松田 葵妃(2年)、難波 郁帆(2年) ユネスコスクールとしての活動の一環として、2024年10月のシェムリアップ訪問以降にカンボジアで学んだこと、それを受けて日本で取り組んだことを紹介した。</p> <p>(1) カンボジアでの学び 日本はODA(政府開発援助)を通じて、つばさ橋、きずな橋、日本橋などのインフラ復興と経済発展を支援してきた。友好の象徴として、カンボジアのお札には日本の国旗や日本車が描かれている。また、「アキ・ラー地雷博物館」では、日本の小松製作所地雷除去機の展示や実際の地雷除去活動の様子が展示されていた。日本は地雷撤去のための人材育成も行い、多くの支援を提供していることが分かった。 上智大学アジア人材養成研究センターは、カンボジア人による、カンボジアのための遺跡保存修復を目的として活動している。同センターは、アンコール・ワットの修復作業、人材育成、そしてアンコール王朝の考古学および建築の調査を通じて、カンボジアの文化復興と平和構築に貢献している。</p> <p>(2) カンボジア・日本の高校との交流 ①カンボジアの中学・高校との交流 シェムリアップにあるバイヨン中学・高等学校は、生徒数1086人(2024年10月)を抱える大きな学校である。今回の活動では、バイヨン中学・高等学校の生徒たちと協力してカンボジア料理を調理し、昼食を一緒に食べた。 ②カンボジア研修旅行を実施している学校間の交流 日本に帰国した後の2024年12月に同じくカンボジア研修旅行を実施している成城高等学校(東京都新宿区)とも交流を行った。この交流の一環として、成城高等学校の生徒と共に、カンボジア料理の「アモックカレー」を作る昼食作り体験も行った。これらの高校生との交流は、異文化理解や国際的な視点を養う充実した機会となった。</p>

(3) カンボジアの女性支援

① パバナサラの取り組み

「パバナサラ」とは、カンボジアの現地女性と日本人女性が運営する工房で、ウォーターヒヤシンスを編んでカゴやバッグなどを製作している。この工房は、カンボジアの女性たちへの支援を目的とした取り組みを行っている。具体的には、子育てなどの理由で、外で働くことが難しい女性に、自宅でもできる仕事を提供している。また、パバナサラでは、カンボジア人が現地の材料を使って製作するお土産を通じて、カンボジアの文化や手工芸の魅力を広めることも目的としている。



② 水戸まちなかフェスティバル（地域のイベント）でのキーホルダー作り

この活動の目的は、カンボジアで学んだことを自分たちの街に還元することである。具体的には、ウォーターヒヤシンスを使ったキーホルダー作りのワークショップを実施した。また、パバナサラの商品の販売もした。カンボジアの女性たちの努力や手作りの温かさを実感してもらい、彼女たちの活動を多くの人にたちに知ってもらうことができた。

(4) カンボジアのウェルビーイングのために～日本での実践を通して～

① カンボジアに行って学んだこと・感じたこと

「支える支援」ではなく、カンボジアと「共に未来を築く」姿勢が重要である。単なる援助に留まらず、現地の人々の尊厳と主体性を尊重した支援の大切さに気付かされた。また、カンボジアで得た学びを社会へ還元することの重要性を強く感じている。例えば、現地での活動内容や体験を地域のイベントで共有することで、地元の人々と知識や成果を分かち合い、ウェルビーイングへの意識を広げる取り組みを行った。この過程を通じて、人と人とのつながりの重要性を改めて実感した。



② 日本とカンボジアの持続可能な社会を作るために

カンボジアにおける教育格差や技術者

不足といった課題解決に向け、日本の技術力を活用した教育・技術支援や留学制度の導入を提案したいと考えている。また、活動を通じて育成された人材を日本で雇用することで、両国が相互に利益を得られる仕組みを構築し、ウェルビーイングの実現を目指す。こうした取り組みを通じて、持続可能な社会の形成に貢献していきたいと考えている。

活動発表

<活動発表 4>

運営者/発表者

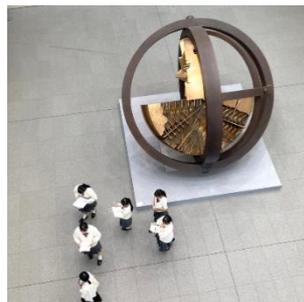
東洋女子高等学校/渥美優希(教員)・宮田秀一朗(教員)・生徒5名

内容

「東洋女子の探究的な学び」

本校では、主に土曜日の3・4時間目に教科横断的な授業である問題探究型学習を実施している。この学習は、生徒が自分の興味関心を深め、多様な人々とかかわりながら、社会・世界につなげて、自分ゴトとして考えていくという活動を基盤としている。そしてこの活動を通して、生徒には、思考・表現する力、リーダーシップ、協働力など様々な力を身につけ、学校目標である「自進力」を育めるよう学校全体で取り組んでいる。また、1・2年次ではTJグローバル教育、2年後半から3年生では土曜講座という形で学年ごとに活動内容を分けており、段階を踏んで生徒が力をつけ、自立的な学習者を目指している。

1年次では、「自分の興味・関心と社会のつながりに気づく」をテーマに、SDGsの基礎学習やミュージアム学習を行う。ミュージアム学習では、都内にある約10の博物館や美術館にご協力いただき、訪問する。自然科学について学ぶ博物館、西洋美術や現代美術に触れられる美術館、歴史や伝統的な建築物について学ぶ博物館と様々な分野から、生徒は興味関心に合わせて訪問先を選択する。そして、数ある作品をじっくり観察・鑑賞し、その中から「100年後に遺したいもの」を一つ選び、その作品に対する思いと作品から導き出される社会とのつながりについてポスター制作を通して、表現する。自分が選んだ思い入れのある作品を身近な社会問題につなげたり、社会問題の解決策を考えたりする際には、深い思考が必要とされる。そして、作品について調べたり、社会問題の現状や解決策について調べたりする際には、情報の取捨選択や根拠となる適切なデータを探す力も必要となる。このミュージアム訪問・ポスター制作の過程を通して、生徒は今後の探究学習で必要となる様々な力の基盤を構築していく。



ポスター製作

<ポスターの項目>

- ・なぜ遺したい？
- ・何を感じた？
- ・どんな社会問題が考えられる？
- ・社会問題を解決するためには？

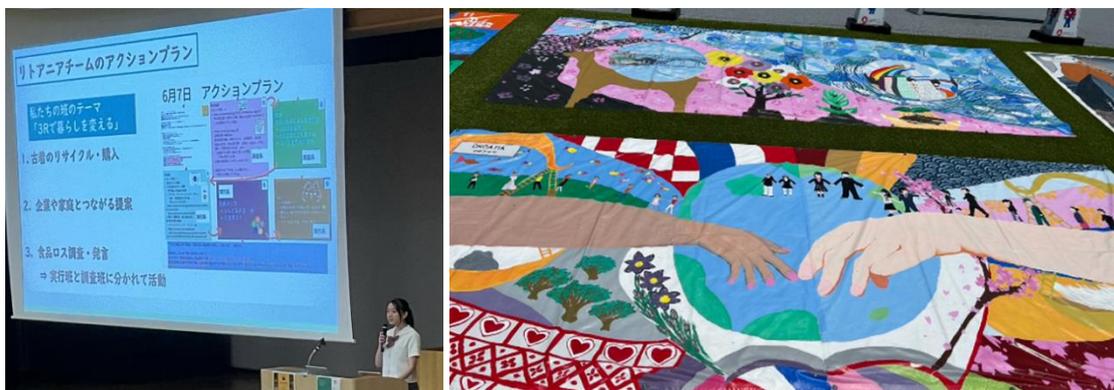
訪問先：国立科学博物館
100年後に遺したいもの：
「鹿踊り～命を尊重する思い～」

<見つけた課題や社会問題>

- ・害獣による人や農作物への被害
 - ・命を尊重する思いが失われつつある
- 私たちの安全な生活と両立して
命を最大限尊重するには



2年次では、1年次での学習を活かし、「実際に海外と交流する」をテーマに協働学習を行っていく。現在、本校では韓国の耕慧女子高等学校、エクアドル、リトアニア（アートマイル）の3カ国の高校とパートナーシップを結び、半年～1年間、異文化交流とSDGsの協働学習を行っている。この学習では、異文化理解を軸にしながら、共通のSDGsのゴールについて学習を行う。まずは、協働学習する相手国について調べたり、自己紹介をしたりして、相手国の理解と交流を深めていく。そして、学習を進めていく中で、インターネット掲示板やzoomを活用し、学習状況の報告やお互いの意見交換を行って、学習を深めていく。2025年度の学習テーマは、「SDGs Goal15 陸の豊かさを守ろう」であり、現在、森林伐採が行われる現状・原因や企業等の対策を学び、今後、相手国と取り組みたい「アクションプラン」を考え、動画や絵本といった成果物を協働作成していく予定である。発表では、これまでの学習についてや、生徒が夏休み中に実践する予定の「アクションプラン」についての報告を行った。韓国と学習をしている生徒は、相手校の所在地である釜山について調べたり、巣鴨商店街で韓国の生徒におすすめしたい地元の魅力について調査したりした。現在は2学期にある交流会の準備を進めている。リトアニアと学習をしている生徒は、「3Rで暮らしを変える」をテーマに、古着の購入や食品ロスについて調査・発言を実行する予定であることを発表した。韓国・エクアドルとの交流は9月で終了となるが、リトアニアとの交流は、アートマイル国際協働プロジェクトを通して、3月まで継続する。アートマイルでは、SDGsのGoalに関する学びを深めた後、これまでの活動の成果や想いを形にするために、未来へ向けたメッセージとそのメッセージを込めた壁画を作成する。本校では、アートマイルに参加して7年目に突入した。これまで、様々な国と協働学習を行い、壁画を作成してきた。その作品が、大阪・関西万博で展示されている。毎年、生徒たちは、学習してきたことを通して、自分たちの思いをさらに良いものとして形にするにはどうしたらいいか丁寧に議論しながら、壁画のデザインを考えることができ、とても思い入れのある作品に仕上げることができた。その作品たちが、多くの人々に向けて公開され、鑑賞されていることは、とても感慨深い。2年次での学習では、異文化交流・グループでのSDGs学習を通して、協働力やリーダーシップを育てていく。



3年次では、「希望進路に基づいた深い探究へ」をテーマに、自身の進路と社会課題を結び付けていく土曜講座へと発展させる。文学、ジェンダー、医療健康、自然科学、情報、地域社会、社会学、心理学、子ども、異文化、SDGs、国際活動という12テーマから、自身の進路に関連する講座を選択し、探究する。この探究学習を通じて、「協働する力」「主体的に考え行動する力」「自己を表現する力」「論理的・批判的に考える力」以上4つの力を学校独自のルーブリックを活用し、段階的に成長を目指している。発表では、生徒の取り組みを二つ報告した。一つ目は、「地域の魅力を発信しよう」という、巣鴨地蔵通り商店街の魅力を若い世代に伝え、巣鴨の地域活性化を目指す講座である。この講座では、同じく巣鴨にある大正大学と連携し、地域メディア専門の教授の講義を受講したり、探究内容のフィードバックをいただいたりしながら実施した。生徒へのアンケートや商店街の方へのインタビューを通して、巣鴨の地域活性化に必要なヒントを情報収集し、若い世代を巣鴨地蔵通り商店街へ呼び込むためのポスターや短冊の作成を行った。巣鴨の魅力を伝えつつ、若者にはどうしたら刺さるのかという観点を意識し、グループごとに成果物の作成を行った。二つ目は、「SDGs 探究」という、SDGsと自身の進路に沿った社会課題に関連させ、解決を目指す講座である。発表した生徒は、服飾関係への進路を志望しており、「SDGs Goal12 つくる責任・つかう責任」をテーマに探究を進めている。この生徒は、衣服の焼却率の高さに着目し、衣服の廃棄を減らすために、解決策の一つとしてアップサイクルを広めていくことを考えた。校内の生徒へ不要な布や衣服の回収を募り、それらを活用して、本校のオープンスクールにて中学生向けにキーケース作りのワークショップを開催した。この活動で見つかった新たな課題を基に、今後も新たな取り組みを実践していくことを現在計画している。

③ポスターと短冊の作成

- ・キャッチコピー
- ・お店のおすすめ商品
- ・おすすめスポットの詳細

大正大学との連携も！

- ・地域メディア専門の教授の講義
- ・ゼミ生の研究発表
- ・探究内容のフィードバック
- ・大正大学や巣鴨の通りに展示



「時代旅行」「甘いひととき」など、若者にも刺さる言葉を意識

今回発表した内容の中には、今年度新たに始めた取り組みもあり、試行錯誤している部分も多い。しかしながら、生徒の可能性を広げ、多様な力を伸長させるため、学校全体で取り組みながら、より良い活動にしていきたい所存である。

活動発表

<活動発表 5>

運営者/発表者

幼保連携型認定こども園 正和幼稚園/奥住大史・橋口伸之介(教員)

内容

「園内田んぼを拠点に」

【園内田んぼ作成】

台湾の八徳幼稚園にて枕木でできた田んぼを知る機会があり、より多くの生き物が寄り付き、四季の変化や食物を自ら育て、食べる喜びを感じ、子どもを中心とした幅広い世代でのコミュニティの場となるよう元々の丸い形のビオトープを園内田んぼへと変化させた。台湾の八徳幼稚園とオンライン交流を取りながら活動を進めていき、園児、保護者、都立山崎高等学校の学生、地域の畑、田んぼ農家の方が参入し、園内田んぼが完成した。



【園内田んぼで広がったコミュニティ】

園内田んぼの作成、米作りを行う中でお手伝いに参加して下さった保護者の方々、都立山崎高等学校の学生、米作りについて教えてくれた農家の方、そして台湾、八徳幼稚園との交流が生まれている。活動中も園内田んぼにどのような生き物が来るのか話したり、米作りについて質問したりしている。



【園内田んぼでの米作り】

① 代かきと田植え

まず初めに田植えをする為の土づくりを行います。子どもたちは田んぼに入り、足で土を踏み、混ぜていく。どろっとした土の感触を味わいながら活動し、土が出来上がると、田植えに移る。ロープの印を目印に稲を植えていく。稲が自立し、成長していくように丁寧に植え、これからの成長に期待を持った。

② 問題発生

稲穂が出て、黄色く色づいてきたころ、田んぼの周りに中身がなくなったもみ殻がたくさん落ちていることに気づき、大切な米が何かに食べられていることに気づく。子どもたちと何が食べているのか原因を探し、鳥が食べに来ていることが分かった。すぐに対策を話し合い、ネットを張ったり、カカシを作成したりした。

③ 稲刈りと脱穀

収穫の時期になり、保護者と共に喜びを分かち合いながら収穫をした。収穫をした稲は干し、次には脱穀へと移る。脱穀で使用するのは保育者の手作りのせんばこぎと牛乳パック。身近な素材が田んぼ活動に用いられている。

④ もみすりと観察

脱穀をした米の籾殻を剥くため、籾摺りを行う。使用するのはすり鉢と野球ボール、米を入れ、野球ボールで摺るともみ殻が剥け、中から玄米が出てくる。子どもたちはじっと見つめ、米の形状を観察する。カメラとモニターを接続して観察も行った。

⑤ 炊飯と実食収穫できた米の炊飯を行った。火をつけるとすぐに米の匂いが漂い、反応を示す子どもたちの姿があった。そして一口ずつ食べてみると、「お米だ」とこれまでの米作りの経過を振り返り、味わっていた。



【園内田んぼの今】

現在は田植えが終わり、稲の成長観察期間に入っている。稲の長さや束の本数を数え、絵を描きに来る子や生き物探しに来る子がいる。カエルの卵らしきものを発見した子が手を触れてみると、それは稲が出した酸素の泡で稲から酸素が出ることを知ることが出来ている。



【日本と台湾】

オンライン交流の中で台湾の米はどんな味がするのか園児から質問を投げかけた。すると、台湾ではおかずと混ぜて米を食べているため、米だけの味がわからないとのことだった。子どもたちは台湾との違いを知ることが出来た。後日、台湾の八徳幼稚園より、日本のおにぎりづくりを実践、味わったとの報告が写真付きで送られてきた。すぐに子どもたちに共有すると、園でも台湾の料理を作って食べてみたいとの話になり、八角などのスパイスの買い出しから行い、ルーローハン作りをし、共有をしている。

【課題とこれからの展望】

現状発生している、藻の発生やこれからやってくる生き物の発見などを通して子どもとどのように向き合い、何が大切でどう継続していくのかを話し合い、共有する機会を設けていく。また、地域と世界の繋がり、環境教育を深めていくことが課題であり、展望として園にて飼育をしている鯉や鴨などの生き物も園内田んぼの活動へと参入していく予定である。台湾との交流も引き続き、設定していく。

活動発表

<活動発表 6>

運営者/発表者
千葉商科大学/影浦亮平、権永詞、手嶋進、中倉智徳、横山真弘(教員)
内容
<p>「千葉商科大学の ESD」</p> <p>千葉商科大学は、市川市にキャンパスがある大学であり、2028年に創立100周年を迎える。商経学部、総合政策学部、サービス創造学部、人間社会学部の4学部と大学院の社会科学の総合大学である（学生数約6,500人）。「自然エネルギー100%大学」を目指しており、大学で創るエネルギーと使うエネルギーの量を同じにするという実践をしている。2023年にサステナビリティ研究所を設置し、2024年7月にASPUnivNet加盟大学になった。それぞれの学部で（または学部横断で）、様々なPBL型アクティブラーニングを精力的に取り組んでいる。学部イベントや学生プロジェクトを含めると、80以上のプロジェクトが動いている。数ある取り組みのうち、いくつかの事例を以下、報告する。</p> <p>講義「SDGs論」</p> <p>SDGsの背後にある考え方・価値観あるいはシティズンシップの歴史の変遷といった理論的な学びをしつつ、エシカル消費、フェアトレード、ジェンダー平等、エネルギー問題、教育問題、情報化社会問題といった具体的なトピックも取り扱う。グループに分かれて、SDGs達成のための取り組みを自主的に発案し実践し、成果をプレゼンで最終授業で報告する。</p> <p>学生による省エネ・創エネの実践と啓発活動「大学の取り組みを学びの機会に」</p> <p>他大学の学生にも参加を呼びかけ、学内の部屋を自分たちで断熱化（内窓を制作、壁に断熱材施工など）した。また、市川市の小学生をキャンパスに招き、屋上太陽光発電設備や断熱教室を案内した。また、市内のイベントに出展し、来訪者にエネルギー関連の説明を実施した。</p>  <p>職人の方に教わり、学生の休憩室内窓を設置、壁に断熱材と化粧板を施工する学生たち（2025年3月）</p> <p>人間社会学部マルシェ「学生発案！地域とつながるマルシェ」</p> <p>2025年7月12日に、人間社会学部マルシェという学生発案の企画を開催した。これは、一人の学生が発案し、共感した30名の学生が運営したイベントだった。15の地域店舗出店、9組のアーティストによるライブ、子供縁日、そして学部の6つのゼミや11</p>

個の活動の紹介を行った。このイベントの目的は、大学、学生、地域がつながることで、地域課題解決のための新しいコミュニティを作るきっかけとなることだった。

実際、マルシェを通じて、500名以上が来場し、イベントとしても成功した。しかしより重要なのは、来場者、地域店舗、大学教員、学生がつながることで、地域課題に取り組む新しい動きが出てきたことである。すでにあった人間社会学部の地域連携のつながりをマルシェで可視化し、出会いの場としたことで、新たな地域課題解決の取り組みが始まりつつある。



短期集中型地域社会探究プログラム「地域社会の課題解決を学生の学びに」

短期集中（2泊3日程度）のアイデアソン形式で集中的に課題のインプット／アウトプットに取り組む。どの地域でも、人口、産業、自然などの観点からコミュニティの持続可能性が共通の課題になった。横須賀市長井「シテコベコース」は2020年より実施しており、横須賀市の農業・漁業振興のイベント企画を通じて地域の歴史・課題を学修する取り組みである。「新潟県小千谷市魅力発見プログラム」は2025年の企画であり、地元企業、観光地、食を中心に魅力創出のための動画制作のプログラムである。



新潟日報デジタルプラス、2025/7/31 <https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/657734>

サービス創造学部の特徴的な講義「プロジェクト実践」

学生自らが企画したアイデアを実践しつつ、正課の単位を取得できる講義である。2025年度は9つのプロジェクトを開講した。内容は、メディア、リラックスサービス、プロモーション、THE UD、スポーツビジネス、コミュニティカフェ、パーティ、ブライダルサービス、新サービス研究開発などである。教室で学んだことを「活動」にいかして実践する学びとなっている。

プロジェクト実践「スポーツビジネス・プロジェクト」

千葉県の球団「千葉ロッテマリーンズ」「千葉ジェッツ」「ジェフユナイテッド市原・千葉」「オービックシーガルズ」と連携し、スポーツビジネスを学びながら、新たなサービスの創造に挑戦している。

千葉商科大学マッチデー（大学を挙げて実施する冠協賛試合）

千葉ロッテマリーンズや千葉ジェッツの公式戦を学生がプロデュースし、学部横断でプロモーションや観客満足度向上を目指した。2024年は8月に千葉ロッテ、12月に千葉ジェッツの公式戦で実施した。冠協賛試合から得られた学びとして、タスク管理や効率的な組織運営（マネジメント能力／計画性）、企画を他団体と協力しながら進める力（チームワーク／リーダーシップ）、毎年のイベントの中で新たな価値提供を考える力（創造力／発想力）が挙げられる。



活動発表

<活動発表 7>

運営者/発表者
東海大学・かながわユネスコスクールネットワーク (KAN) / 橋本匠司(教員)
内容
<p>「日本人学校での ESD 活動における視点と課題～インド・カタールでの実践から」</p> <p>○ESD との出会い～東日本大震災後の復興に向けて(2012)</p> <p>○横浜市 ESD コンソーシアム推進校として、ESD 研究授業の発表(2016)</p> <p>～ESD を実践していくためにも、学校における時間を資産として捉え、組織・年間予定・教育課程を管理職の視点で見直していく必要がある事を実感する。</p> <p>☆在外教育施設である日本人学校校長としての ESD に対する取り組み</p> <p>～私学である日本人学校は、現地日本人の要請に応えることはもちろん、学校運営費を確保し、現地国との関係も視野に入れながら日々の運営を行わなければならない。持続可能な学校であるために、海外においても ESD の考えを取り入れ、日本人そして現地の方々にとって魅力ある存在にしていくことが重要である。</p> <p>◎インド共和国 ムンバイ日本人学校での実践(2017~2019)</p> <p>～ESD が実践できる学校環境とするために 4 点に留意して学校運営を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 前例踏襲をせず、授業者のイメージを全員で補完するイメージ ② 9 月までで組織を改編～半年間というスパンをもって引継ぎ ③ 保護者の思いを日々吸い上げられるよう、窓口の明確化・一本化 ④ 日本人会・運営委員会・総領事館の理解を得るため、積極的なアプローチ <p>その上で、日本人学校を日本人コミュニティの拠り所になっていくことを目指し、教職員、児童生徒、周囲の願いやアイデアを基に、多くの取り組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化スポーツクラブ(剣道・サッカー・卓球・和風>休日の学校開放、バザー) ・イングリッシュタイム(低学年向け英語アクティビティ>週1放課後) ・ムンバイタイム(プログラミングに特化した総合的学習の時間) ・英検会(学校運営から、参加者の受益者負担となるような組織変更) ・アメリカンスクール、現地校との定期的な授業、行事交流 ・インド内日系企業等からの外部講師の積極的な招請 ・インド内日系企業に関する調査研究(マルチ・スズキ) <p>～それぞれの思いやアイデアを実現していくためには、<u>実施が可能になるよう教育課程を見直すとともに、全職員での実施に向けた思いや考えの共有が必要となる。</u>何より、学校環境として教職員の自由度を高めていくことが重要である。</p> <p>○コロナ禍の中での帰国(2020)</p> <p>～教職員が自分自身の教育活動の時間を確保できるように 午前中 5 校時 40 分授業(1 日 7 時間授業・小学校)の実施</p>



◎カタル ドーハ日本人学校での実践(2023~2024)

～午前中5校時40分授業を2023.9より実施、午前中に教科指導を終え、午後は総合的な学習の時間を中心に、活動の時間とする。>急な日程変更にも対応>午後の時間の活用方法には、児童生徒そして教職員の思いを取り入れながら運用

～海外子女教育振興財団後援の「日本文化発信拠点校」となったこと、さらにドーハにて「GREEN EXPO 2023」が開催され、本校に協力依頼がきたことをきっかけに、ドーハという厳しい自然環境の中で植物を育てることができるだろうか、という課題に児童生徒の意識が向いていった。



<2023年度>

ドーハ国内の環境の調査、種子の発芽条件の確認、種団子づくり>種植え、フラクタル屋根の理解、ミストシャワーの効果、自分の考えたパビリオン設計
※日本パビリオンデザインマネージャー 保様の協力による

<2024年度>

「炎天下にある自分たちの学校を花一杯にしたい」との思いから、その実現に向けての活動を開始。種子や土の手に入れ方、あぜ道の作り方、必要な材料の検討と入手方法>GREEN EXPO 日本館の廃材の再利用、現在あるスプリンクラーの活用



+日本国内の学校との情報交換、現地企業の社会貢献事業とのタイアップ

<2025年度>

「2027 GREEN EXPO YOKOHAMA までに花一杯の学校を実現したい」
実現のための活動費捻出のために、クラウドファンディングを開始
～目標実現のため何をすべきか、児童生徒と教職員が一体となって学ぶ場が実現している。

日本人学校での実践を通して（管理職としての視点）

大切なのは、まずは各学校における現状把握である。その中で教職員が前向きに活動できる施策を実施することである。教職員各自が余裕、自信をもって子どもたちに向き合えて初めて子どもの良さが前面に押し出され、活動そのものの価値が高まる。

子どもたちは大人が考える以上にアイデアをもっており、また実現のために努力する。（失敗もあるが、それが学びとなる。）正しい評価があり、充実感が生まれれば、その活動はその場限りとはならず、個の思いや願いを包含しながら、そして時には姿を変えながら、持続したものになっていくであろう。

管理職は教職員を信じ、任せ、教職員は子どもたちを信じ、任せる。この構図が出来上がるよう各学校の管理職は日々知見を広め、その環境をより良くしていくことを第一として学校運営にのぞむことが重要であると考えます。

子どもたち、教職員、保護者、地域からの明るい声掛けが管理職のエネルギーとなり、明日もきっと元気でいい日になることと信じている。

分科会

<分科会 A>

運営者
玉川大学教育学部、大妻中野中学校・高等学校、東京都立山崎高等学校
内容
<p>分科会Aは「SDGs に主体的に向き合える地球市民の育成－若者エンパワメントの新たな挑戦」というテーマのもと、玉川大学教育学部の学生（4名）、大妻中野中学校・高等学校の生徒（29名）、東京都立山崎高等学校の生徒（48名）の3校による高大連携ワークショップを実施した。参加者全体を異なるテーマを扱う2つのグループに分け、それぞれのグループで2時間、平行して話し合いを進め、成果物を作成した：</p> <ul style="list-style-type: none">● グループ1：テーマ「生物多様性の保全に向けた絶滅危惧種の保護」● グループ2：テーマ「ポスト SDGs の課題 － 若者にできる持続可能な社会づくり」 <p>各グループに、大妻中野中学校・高等学校の生徒、東京都立山崎高等学校の生徒、玉川大学教育学部の学生が入り、高大連携の混成グループを結成した。テーマに関する議論と同時に、各グループ内で学校間交流を進め、連帯意識を醸成することも目標であった。</p> <p>【グループ1「生物多様性の保全」の報告】</p> <p>グループ1では、「生物多様性の保全」をテーマに、生物多様性ホットスポットの中でも熱帯多雨林が原生する東南アジアエリアにターゲットを絞って、以下の①、②の二つの立場に分かれて議論を進めた。双方の主張を確認したのち、どのようにすれば生物多様性を維持し続けることができる生態系を確立しながら、現地の方々の生活も保障できるかについて議論を深めた：</p> <ul style="list-style-type: none">①絶滅危惧種や固有種の保護とその重要性を訴える保護団体の立場②経済的・文化的理由による人為的攪乱を起こしてしまう密猟団体や地元住民の立場 <p>議論の末、動物を守るための植林活動が、土壌の形成や水質の維持などその他の環境要因にも作用していることがわかった。生態系の循環システムの複雑さに気が付いた一方で、経済効果を生み出している世界的な需要の集中とそれに応えようと供給を増やすことが、生態系の生産量を超えてしまっていることが原因であるということもわかった。そのため、今回の議論の中で生徒が打ち出した解決案は、「世界的な需要と供給を生態系の復元力の範疇に制限し、抑えたことによる経済損失をエコツーリズム事業でまかなえるよう推進することで解決に導ける」とした。</p> <p>今後、どのような新事業であれば持続可能な展開ができるか、現地の実際の様子も踏まえて議論を深め、具体案の提案を考えていくことへ発展させたいという展望が生まれた。</p>



【グループ2「ポストSDGsの課題」のワークショップの振り返りと成果・展望】

分科会Aのグループ2では、本大会が掲げる「ESDの20年とこれから」をもとに、ワークショップ「ポストSDGsの課題」を担当した。分科会Aグループ2は、玉川大学教育学部の学生をメンターとし、大妻中野中学校・高等学校と東京都立山崎高等学校の生徒、ユネスコスクール関係者の方々によるテーマの異なる8つのグループで構成された。参加校の生徒や参加者は、グループごとに「ポストSDGsポスター」を題材に、2030年問題の課題について調査と課題解決に向けて活発な意見交換を展開した。

グループ活動での題材となったポスターでは、提案、行動を上段に設定し、グループテーマに対して課題発見から比較研究へとつなげた。SDGsの番号ごとの8テーマに対する新たな目標設定を促し、国際比較や多様な視点で分析した結果、「働き方と少子化の関連性」など、テーマを横断する事象に気づく生徒も見られた。

事後アンケートでは、参加生徒の約9割が「何らかの気づきを得た」と回答した。異校種や大人との討論の中で、課題に対する新たな視点からの気づきが多く挙げられ、それを通じた多様な行動の変容が見られた。一方で、行動宣言が抽象的で、比較研究においても指標や根拠が不十分なケースが見られた。今後の展望としては、生徒一人ひとりが持続可能な社会の一員として、課題発見と課題解決に対し自分事として捉え、取り組めるようにみんなで一層の教育の質向上を目指してゆきたい。



分科会

<分科会 B>

運営者
創価大学ユネスコクラブ、創価高校
内容
<p>第6回ユネスコスクール関東ブロック大会第二部において、創価大学ユネスコクラブと創価高校の有志生徒は、第2分科会「これからの平和教育を考える-核廃絶ゲームを通じた意識啓発の意義」を実施した。</p> <p>核兵器の存在は人類の存続を脅かす地球規模の課題である。持続可能な開発のための教育（ESD）は、若者が主体的に考え、行動する力を育むことが重要視されている。</p> <p>本分科会は、その一環として創価高校の有志が開発した「核廃絶カードゲーム」を活用した。このゲームは、創価高校の生徒が2022年度全国高校生フォーラムに出場した際に制作し、入賞した作品である。</p> <p>分科会の企画・運営は、創価大学ユネスコクラブの学生と創価高校の有志生徒が共同で行った。参加者が核兵器廃絶に関する国際的な課題や立場の違いを体験的に理解することを目的として、「どうしたら核兵器の廃絶ができるのか」、「どうすれば平和な世界を築けるのか」といったテーマについて活発な議論が交わされた。</p> <p>参加した高校生からは、以下のような感想が寄せられた。</p> <p>「最後に一国が核兵器を使用した回と、全ての国が核兵器を廃絶した回があったことから、たとえ一国でも核兵器を保有していれば、撃ってくるかもしれないという疑念が生まれ、平和は保たれなかった。そのため、核兵器は一つたりとも世界に存在してはならないと思った。」</p> <p>「教員や教職大学院の学生が参加したチームだったので、核廃絶には教育が不可欠であるという観点について、ディスカッションを通して知ることができた。」</p> <p>「運営側としても、年齢・性別を問わず多くの方に参加していただき、当初の目的である『なぜ核兵器はなくならないのか』という部分を参加者の方に核廃絶ゲームを通して考えていただく機会になったと思う。」</p>



分科会の様子を報告する
ユネスコクラブ学生と創価高校生



核廃絶ゲーム実施の様子



創価大学ユネスコクラブ学生と創価高校の有志生徒

↑「核廃絶ゲーム」は、スーパーグローバルハイスクールでもある創価高校が実施する選抜型教育プログラムであるGLP（グローバル・リーダーズ・プログラム）の生徒たちが中心となって制作した。

参加者アンケートの実施

回答数 117

1. この大会にはどのような立場で参加されましたか

学校教職員	31
学生・生徒・児童	81
その他	5

2. 一部: 基調講演「ESDの進化-どう変わろうとしているのか-」の満足度はいかがでしたか

評価5	44	37.6%
評価4	27	23.1%
評価3	37	31.6%
評価2	1	0.8%
評価1	3	2.6%
未回答	5	4.3%

3. ポスター発表の満足度はいかがでしたか

評価5	33	28.2%
評価4	25	21.3%
評価3	24	20.5%
評価2	0	0.0%
評価1	3	2.6%
未回答	32	27.4%

2. 二部: どの会に参加されましたか(複数回答)

活動発表	44
分科会 A: SDGs に主体的に向き合える地球市民の育成-若者エンパワメントの新たな挑戦	51
分科会 B: これからの平和教育を考える-核廃絶ゲームを通じた意識啓発の意義	20
未回答	7

3. 二部: 活動発表・分科会の満足度はいかがでしたか

評価5	47	40.2%
評価4	33	28.2%
評価3	25	21.4%
評価2	1	0.8%
評価1	3	2.6%
未回答	8	6.8%

4. ご感想・ご意見をご記入ください

主な回答

- ・様々な教育現場の実践を聞くことができ、大変参考になった。自身の学校でも活かしていきたい。(活動発表参加者)
- ・ユネスコスクールの横のつながりを知ることができた。(活動発表参加者)
- ・複数人で協力して課題を立てたり、情報収集をしたりすることは今後に役立つので、いい経験になった。(分科会参加者)
- ・なかなか交流する場面がないため、生徒たちにとっても刺激的だったと思う。(分科会参加者)
- ・様々なキャリアの方々と活動ができて良かった。(分科会参加者)
- ・高校生たちが数多く参加し、議論に加わってくれたことは、混迷する現代社会打開のための光明であると感じた。全体会場でディスカッションする場があってもいいのではないか。(分科会参加者)

以上

第6回ユネスコスクール関東ブロック大会 報告書

発行日 2025年10月17日
発行者 成蹊学園サステナビリティ教育研究センター
〒180-8633
東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
0422-37-3480
ercs@jc.seikei.ac.jp